

漢文訓読史上の一問題 (三)

— 助動詞「ざり」について —

門 前 正 彦

(一)

訓読史上の問題点は、勿論色々な方面から考えられるであろうが、いま特に国語の助詞中でも極めて特異な性格をもち、存在及び陳述の意を表わす助詞「あり」が

他の語と融合する現象について、融合形が完成していたか、あるいは未融合形であったかを問題にしてみよう。

奈良時代の成立である古事記、日本書紀、風土記等の従来の訓を見るに、打消の助動詞「ざり」・推量の「べかり」・指定の「なり」・「たり」・完了の「たり」及び形容詞の補助活用・形容助詞等の、所謂陳述を表わす助詞「あり」と他の語が重ねて用いられ、母音が並ぶことをやけて一方が脱落した結果生じた語を、いとも無難作に融合形でよんでいる。これまで、この助詞「あり」の融合・未融合について問題となったことは、私の知っ

ているかぎりでは極めて少なく、安藤正次氏の「萬葉人の言語意識についての一考察」特に「爾有」・「在」・「有」を中世として、^{注1}春日和男氏「助詞「あり」が融合する

動詞「万葉集と宣命とから」^{注2}同「助動詞「たり」の形

成について——「てあり」と「たり」^{注3}佐伯梅友博士「

「にあり」から「である」へ」^{注4}三吉陽氏「「ずあり」

「ざり」^{注5}「ず」についての一考察」等である。したがっ

て、「あり」の融合・未融合に關しては、従来ほとんど

関心をはらわず、我国の上代文献にしても、ことごとく

融合形でよんでいるのが現状である。

右にのべた如き「あり」の融合・未融合に無関心な原

因としては、大体次のようなことが考えられると思う。

まず、奈良時代の散文の資料が極めて少ないというこ
とがある。奈良時代の言語研究資料としては、韻文であ

る万葉集と散文の続日本紀所載の宣命ノ々が残っている。なからうか。以上、いずれも帰する所は資料の不足とい
 ところで、万葉集は、全体の量からみれば必ずしも少部
 分は決して充分であるとはいえないようである。しかも
 韻文である関係上「あり」の融合・未融合に関しては、
 散文とは異なった面が存するのではないかとも思われる。
 これに反して続日本紀宣命は、表記からよみかたを推定
 することはかなりできそうだが、量の面から見ると非常
 な不満がある。要するに融合形の成立時期とみられる奈
 良時代から平安時代初期にいたる散文の資料は極めて乏
 しく、これまで融合・未融合の問題について考えよう
 も、資料の面でかなりの制約を受けたのではなからうか。
 次に、このような事情のために、融合形の成立したと
 推定される時期により後の資料は比較的豊富であり、融
 合形を見ることは多かったが、未融合形が残存していた
 と思われる時期の資料は少数であり、未融合形が目につ
 ける機会是非常に少なかったと思われる。そこで自然我
 々は、融合形は文献以前の時代にすでに完成していたと
 少しの疑いももたずに頭からきめてかかっているのでは
 ないか。以上、いずれも帰する所は資料の不足とい
 う点にある。

しかし、資料は不足であるにしても、先にあげた如き
 各語について

(イ) 古事記・日本書紀の成立したころ、はたして完全に
 融合してしまっていたか、どうか。

(ロ) これらの各語は、全部が同時に融合してしまつたの
 ではなくて、融合の時期にそれぞれ若干の遅速があ
 ったのではなからうか。

一応以上のような疑問が生じるのは当然であろう。し
 かも、前記諸氏の研究は、そのほとんどが論文の題目に
 よつても判るように、主として万葉・宣命を材料として
 研究されたものである。したがって、前述した如き資料
 の乏しさという点で調査研究にある程度の制約があり、
 結論にいくらかのかたよりが存するのではないかとさえ
 も考えられるのである。

そこで、私は本稿において、動詞「あり」が種々の先
 行語と融合して成立した助動詞、形容詞、形容動詞のう

ち、もつともおそくまで未融合のまゝ残つたと思われる助動詞「ざり」について、近年著して研究が進み、新しい国語史資料として注目されている平安時代極初期の訓点本を主に材料として

(1) 打消の助動詞「ざり」の発生。

(2) 未融合形「ずあり」と融合形「ざり」とどちらが多いか。

以上の点について形態の上から調査し、それに関連して奈良時代の漢字文献の訓読について述べてみようと思うのである。

(二)

小林好日博士は、「日本文法史」において、打消の助動詞「ず」の活用を「ず・ず・ぬ・ぬ」の外、連用形に「に」又、万葉集の東国方言に未然形「な」があることを指摘されて

これらを考へると、「ず」とは別に「な・に・ぬ・ね」と四段に語いた古い否定の形があつて、後に之に左行変格動詞「ず」が結びついて出来た「ず」が、未然

・連用・終止にもつばら用いられるやうになつたものであろう。多くの国語に於て(4)音が否定にあらはれると同じく、わが国に於ても、否定の観念は(4)音にあらはれてゐることは疑はれない。 181ペ

右のやうにのべておられる。しかし、右の推定は文献以前の向題であるから、助動詞「ず」の発生については、^{注6}現存の資料だけでは何とも断言できない。

しかるに、「ざり」の形成過程は、平安時代極初期の訓読語を調査することによつて、ある程度の実證が可能であるようである。打消の「ざり」に關して、大槻文彦博士は「廣日本文典」において、

「ず」ト動詞ノ「あり」ト約マリテ「ざり」トナル事
常ナリ。 126ペ

とのべておられるし、又、山田孝雄博士の「日本文法講義」にも

「ざり」は「ず」と「あり」との合併して成れるものにして良行変格の活用を有す。 152ペ
とある。このことは万葉集に

○荒津乃海^{あらつのみ} 之保悲思保美知^{しほひしほみち} 時波安禮登^{ときはあれど} 伊頭禮乃時^{いづれの時}
加^か 吾孤悲射良牟^{わがこひ射らむ} 十七・389/

のような融合形「ざら」があるが、他方では
○多知波奈乃^{たちばなの} 之多布久可是乃^{したふくかぜの} 可具波志伎^{かぐはしき} 都久波能^{つくはの}
夜麻乎^{やまを} 古比須安良米可毛^{こひすあらめかも} 二十・437/

の如き未融合形「ずあら」も存するし、後述の如く平安
初期の点本類では未融合形「ずあら・すあり・ずある・
すあれ」が普通であるので、充分根拠のある事と考えら
れる。

しからば、何故に「ず」と「あり」とは並んで用いら
れ、融合したのだろうか、この両者が融合しなければな
らなかつた事情は如何なるものであろうか、この問題に
ついて考える前に、しばらく「ず」および「あり」につ
いての従来の研究をふりかえってみよう。

審士谷成章は、「あゆひ抄」おほむねにおいて、用言
を事・状に二大別し、事を更に事（動詞）・孔（ラ変）
に分け、状は在（形容動詞）・芝（形容詞ク活）・鋪（
同シク活）・返状（装図にあげず）に分けている。さて、

38 (三ノ 38)
動詞「あり」を普通一般の動詞とは別のものとして區別
しているのは、一応注目する必要がある。又、彼のい
う返状とは如何なるものをさすか、装図にあげていない
ので、詳細は不明であるが、打消の助動詞に關係あるも
のではないかと考えられている。^{注ク}

鈴木朗は用言を全く新しい観点から分けることを試み
ている。その著「言語四種論」の形状詞、作用詞事にお
いて、国語の全活用語を終止形がイ韻であるか、ウ韻で
あるかによって二種に分ち、前者を形状詞、後者を作用
詞とした。これは単に形態上の分類のみにとまらず、
彼の命名によつても明らかな如く、形状詞は事物の形状
を、作用詞は事物の作用を表わしているという意義的分
類でもある。ところでこの分類では「あり」は形状詞に
はいつてゐる。

東條義門は「和語説略図」で、用言を形状言・作用言
とし、形状言を(1)今いう形容詞、(2)過去の助動詞「き」、
(3)打消の助動詞「ず」、「じ」、(4)「有り」の類の四
種に分ける。ここでは向題の「ず」および「あり」を形

状言の中に入れている。

山田孝雄博士は「日本文法講義」において、「あり」が存在の義を、更に進んでは陳述の義のみをあらわすとされた。(109 ペ)

松尾捨治郎博士は「国文法論纂」で「自分はずを形容詞的のもの、中に、入れたいと思ふ」として、その理由に(1)「ず」の未然形に助動詞が接続しないで「ば」「と」も「が」接続する。(2)連用形にも「て」「して」が接続するだけである。(3)終止形にも助動詞が接続しない。以上の点をあげ、更に「ず」に命令法のないのも、其の語が形容詞的だからと見れば、善くわかる」とのべられた。

橋本進吉博士は、「助動詞の分類について」で「ず」の用法を種々な面から検討して「これによれば、「ず」は形容詞的なものであって、「ざり」はその補助活用と見るべきものである事明かである」とのべておられる。

以上これまでの研究によって明らかのように、助動詞「ず」は活用形式から見ると、動詞型、形容詞型のいずれにも似たところがなく特殊活用型とでもいうべきもの

であるが、意味の上からは、江戸時代の学者がみとめたように形容詞的であり、用法の面からは、松尾・橋本両博士の指摘されたように、明らかに形容詞的性格を有する。他方「あり」は「ず」と同様に形容詞的意義を有しながら、用法の面では動詞的で自由に下に助動詞を接続させることができ、陳述のみを表わし、補助用言になり得る。そこで、先に述べた如き、「ず」の欠点を補うために「あり」が「ず」の下に用いられ、融合してしまうのは当然考えられよう。

さて、「ざり」発生の理由を、形容詞性の語「ず」が下に助動詞を接続させることができないうこととしたが、これが果して妥当かどうかを一応確める必要がある。そこで、「ざり」の下に一体どのような語が接続しているかを調査してみよう。

和文の代表として源氏物語をみると

未然 連用 終止 連体 已然 命令

やら
まし
ざり
けむ

／＼
ざり
なりむ

39 (三)

39

(ただし「さらなむ」、「ざれば」極少数あり)

下に接続する語は右の通りで、大体前の説明と矛盾しないようである。

他方、漢文訓読文では、

未然 連用 終止 連体 已然 余令

$\begin{array}{c} \text{さ} \nearrow \text{ら} \text{ま} \text{し} \\ \text{し} \text{む} \end{array} \quad \begin{array}{c} \text{ざ} \nearrow \text{り} \text{へ} \text{き} \\ \text{つ} \end{array} \quad \begin{array}{c} \text{さ} \nearrow \text{る} \text{へ} \text{し} \\ \text{なり} \end{array} \quad \begin{array}{c} \text{ざ} \nearrow \text{れ} \text{へ} \text{ども} \\ \text{は} \end{array} \quad \begin{array}{c} \text{ざ} \text{れ} \end{array}$

体言

接続は以上の如くであり、命令形・連体形・已然形は助動詞が下に接続しない場合にも用いられている。これは一体どのように考えたらよいのだろうか。命令形は除外するとしても、連体形「ざる」の下に体言およびそれに準ずるもの、已然形「ざれ」の下に助詞「ば」、「と」も「が」接続しているのは、先の理由では説明に困難なようである。これまで補助活用成立については種々論じられてきたが、この点に關しては何の説明もなかった。

しかし、この訓読文における連体形「ざる」・已然形「ざれ」の補助活用成立の理由から考えると例外的な用法に対する疑向も、平安極初期の訓読文を調査すること

40 (三) 40

によって全く氷解してしまうのである。訓読文でも古くは連体形に(助動詞でなく体言がつづく場合は)大体「ぬ」が用いられていたことは、小論「漢文訓読史上の問題——わ清助動詞の連体形について——」^{注9}で指摘しておいた通りである。同様に已然形も、通説に反して古くは「ね」が用いられる傾向のあることが調査によって判明するのであるが、これは、ここでは紙数の余裕もないので改めて次の機会に用例をあげてのべたい。とにかく、平安極初期の漢文訓読文においては、「ずある」の下には助動詞が接続することが多く、体言がつく場合は「ぬ」が、助詞「ば」、「ども」が接続する已然形には「ね」が主として用いられることから、先の「ざり」発生の原因が訓読文においてもまったく妥当であることが判ることを強調しておく。

(三)

まず奈良時代の仮名書き文献として記紀の歌謡で、「ずあり」「ざり」の用例をさがしてみよう。ただし前述の如く用例は極めて少ない上に、歌謡は音数の制約によ

って融合に影響する矣が大きいとも思われるので、一応参考にする程度にとどめる。結論を先にいえば、古事記・日本書紀の歌謡および訓注を通じて（一字一音の仮名書きのみ）「ずあり」「ざり」の全用例を検討するに融合形「ざり」は各活用形一例も存在しない。すべて未然形の未然形「ずあり」のみで、下に助動詞「む」あるいは「まし」が接続しているものが三例ある、以下例を示す。

○御諸の、その高城なる 大豕子が腹 大豕子が 腹にある 肝向ふ 心をだにか 阿比奈母波受阿良牟

記 61

○ぬば玉の 甲斐の黒駒 鞍著せば 命死なまし 甲斐の黒駒 一本に命死なましに換へて 伴志歌瑞阿羅磨志と云へり

記 81

○道に逢ふや 尾代の子 母にこそ 杖擧曳儒阿羅毎

記 82

以上である。

次に同じく歌謡である万葉集を調査してみよう。万葉集は全部が一字一音の仮名書きではなく、表記が不完全な部分もあり、融合形・未融合形両者の数を統計にとつて正確に比較するわけにはいかない。仮名書きでよみかたの明瞭な部分のみにかぎって調べてみると、融合した未然形「ざら」が四例（3396・3735・3741・3891）下の助動詞「なく」二例（「む」二例）、已然形「ざれ」が一例（3735）下に助動詞「ど」が接続）という少数である。これに対して、仮名書きの未融合形は、未然形に二例（3396・4371）、連用形に三例（854・3730・4496）、連体形に二例（3584・4075）である。しかも、これらの例はいずれも下に助動詞「む」

「き」「けり」「ら」「らむ」が接続しているもので、後世では当然融合すべきものである。他の表記の部分には、まだ調査していないが、万葉集には融合形と未融合形の両者が並び存していたことは明らかであろう。

以上、韻文である記紀歌謡および万葉集を調べたが、その結果、少くとも歌謡でも未融合形「ずあり」が存していたことは確実である。

次に仮名書きの散文資料として特殊な例ではあるが、

正倉院文書には、

布多止已^{ふたとと}呂乃^{この}己^{この}呂毛^{のみ}乃^の美毛^の止乃^の加多^{のか}知支^の々^の多未^のフ^の
爾多^{にたて}天^{まつり}萬都利^{あぐし}阿久^か之^も加毛^よ與^ね禰波^は夜末^{やまた}多波^は多^た萬波^{まは}須阿良^{すあり}

牟^む

の如き未然形の未融合形が一例ある。しかるに東大寺諷
誦文稿には、(上略) 一、施^シヲ不堪^{ザム}人^ヒ。(下略)のよ
うな融合形もある。いずれにしてもこれらはあまりにも
孤立的な例であり、勿論これだけでは融合形・未融合形
のいずれが多かったとも断定はできない。

次に宣命の例をみよう。宣命は散文であり、助動詞・
助詞等が表記してある場合が多いので、仮名書き程では
ないにしても比較的よみかたが推定しやすい。しかも統
日本紀の宣命では、これまでの調査よりもまとまった教
の例がみられるようである。宣命は周知のように所謂宣
命書きで記されているが、一部分には純粹の漢文体の部
分を含んでいる。(たとえば第四詔の後半等)今は漢文
体の部分は、考察の範囲から除くことにする。

42 (三) 42

さて統日本紀宣命における「すあり」「ざり」の全国
例は、表記の方法によって分類すると、大体次の三つに
分けられよう。

(A) 漢文式表記(不十動詞)

(B) 漢仮名書き(ほぼ一字一音で表記)

(C) 混合表記 (A)と不完全な(B)との混合)

以上(A)(B)(C)の内、(A)はどのようによんだか不明であ
るから、今は除く。(B)は仮名書きに準ずるもので、よみ
かたも仮名書き同様確実に推定できる。(C)は(B)にくらべ
るとよみに疑問が残るので、取扱に注意を要する。そこ
で、(A)(B)(C)の内(B)(C)を対象にして統日本紀宣命から
全用例を調査した結果を、次に示してみよう。

(B) 準仮名書き

未然形

○復救^ス天下^ノ乃^ハ誰^ハ曾^ハ君^ハ乃^ハ臣^ハ爾^ハ不在^ハ安良^ハ乎^ハ 28詔

連用形

○諸^ハ氏^ハ氏^ハ人^ハ等^ハ乎^ハ進都^ハ可^ハ方^ハ止^ハ須^ハ己^ハ理^ハ乃^ハ如^ハ毛^ハ不在^ハ阿利^ハ都^ハ

28詔

連体形

○佛乃御袈裟毛服天在止国家乃政乎不行阿流不得

28 詔

○夫人止之己戌先祖乃名手與繼比呂止武不念阿流不在

28 詔

○今方身毛不敢阿流物手夜書不返天之護助奉侍乎

41 詔

已然形・命令形なし

(c) 混合表記

未然形

○如此宣大命爾不從將在人波

16 詔

○親王多治賜天曰仁治不賜在止為王奈

25 詔

○可久賜故方平使時仁奉侍方止誰人可不奉侍在年

32 詔

連用形

○大政之始波人心未定在波可吾子為皇太子止定

25 詔

連体形

朕者不堪止辭白而不坐在間爾

○然今乃間此太子乎定不賜在故方

已然形

○猶人方不美在等心中惡久垢久濁天在人波必天地現之

示給都物言

○萬機密天志御身不敢賜有

以上の如くである。「ずあり」の数を表にして示すと

計	C	B	表 記	音 用 形
			未然	連用
4	3	1	終止	連体
2	1	1	已然	命令
/	/	/		
5	2	3		
2	2	6		
0	0	0		

となる。要するに宣命においては、全用例を調べてみ

るに (B) の例のように「ずあり」とは仮名書きで記し

てあるか、若しくは (C) 例の如き「ずあり」とよむことが

できるものばかりである。「ざり」と明記したものはた

だの一例も見当らない。宣命で「ざり」の表記が明瞭に

なされているのは、少し時代が下って、続日本後記、仁明天皇、承和八年五月に（上略）頃者涉旬天不雨^{佐流淡}如有崇とあるのが、管見に入った最古の例である。以上の調査によって、散文である続日本紀宣命においては、歌謡とは若干事情を異にしており、ことごとく未融合形「ずあり」であるから、従来の古事記、日本書紀等の訓「ざり」という融合形はこれだけの調査によっても、極めて疑わしいといわなければならない。

(四)

加点年代の明記してある最古の成実論（西征²⁸加点）をはじめとする平安時代極初期の点本は、奈良時代をさることわずかに数十年であり、古事記、日本書紀等の訓法を考える上に重要な資料となり得ることは、すでに諸先輩によって指摘されている。^{注10}しかし、訓点研究も従来はヲコト点・仮名字体の研究にのみ重点がおかれてきた嫌いがあり、國語資料として最も重要な解詠文の発表されたものは非常に少ないが、現在までに公表された平安初期点本の解詠文から前と同様に「ずあり」「ざり」の

用例を調査する。以下、ヲコト点や仮名字体から判断して、いずれも平安初期の加点と推測されるもののうち、推定年代の古いものから順次用例をあげてみよう。

聖語藏御本大乗阿毘達磨雜集論卷第十二には未融合の連体形が一例ある。融合形はなし。

○安立（する）所の正法（に）非ずある性（に）授者（も）受者（も）俱に勝進の果を證（すること）不能（の）故（に）。

成実論卷第十一・十二・十三・十六・十八各卷を通じて、未然形の未融合三例、連体形の未融合が二例ある。融合形なし

○何故（ぞ）縁せ（ず）「不」あらむ 18

○是の故（に）若（一）此の第五智を生せ（ず）「未」あらむ者^{ひと}は生（す）^な忘（し）。

○是故に少（し）と雖亦信（ず）可（から）不あらむや

○見^み不^ふあるを見てあるより想たまひしを「而」罪无（き）こと得非（ある）べし。

○二を超（ゆる）ことは能（は）ず「不」（あ）るが如

ま

山田本妙法蓮華經方便品第二には用例が多いし、容易に見られるとは思うので、全用例をあげるのはやめて、各活用形の融合・未融合の数を示すにとどめる。

融合 / 活用形 未融合		未然	連用	終止	連体	已然	命令
未融合(すあり)	融合(さり)	4	0	4	0	1	1
0	0	0	0	0	0	0	0

右のように未融合形「すあり」ばかりで、融合形「さり」は一例もない。

大唐三藏玄奘法師表啓^{注14}では未融合の連用形が一例、已然形が一例ある。ここではじめて明瞭な已然形の融合例が出てくる。

○張竊が望(み)しも「而」博^{ヒキ}カラす(あり)き。

○玄奘學院秘に非ず(あ)レは識該通に謝(あら)サレ

ハ向の以てか

西大寺本金光明最勝王經十卷^{注15}には、各活用形とも用例

が比較的豊富であり、未融合形が圧倒的に多いが、こゝにも未然形と連体形に各々一例ずつ融合形があることは、注意しなければならぬ。次に融合・未融合の数を表に示す。

融合 / 活用形 未融合		未然	連用	終止	連体	已然	命令
未融合(すあり)	融合(さり)	21	0	8	1	7	0
1	0	0	0	0	0	0	1

唐招提寺本金光明最勝王經卷第六^{注16}には未融合の未然形が四例ある。融合形はなし。

○常に妙高を燃^{ヒキ}(し)て烟を絶工不アラ令メヨ

○若官柴を求(む)とも意に稱は不アラシメムといふこと无

○我レ皆彼レをして憶(し)て念(し)て忘^{サシ}レ不アラシ

メム

○隱没せ不アラ令メムトヲモヒテナリ(と)マラス。

以上、これまで調査した平安極初期の点本に若干の中、

が各々一例、三蔵法師表啓に已然形が一例あるだけである。

(五)

最後に、以上のべたところをまとめ、あわせて古事記訓法の問題について少しばかりふれて、この小稿の結論にかえようと思う。

まず打消の助動詞「やり」の発生についていうならば、

これはこれまでにあげた未融合の諸例が示すように助動詞「ず」の連用形に助動詞「あり」が融合してできたものである。助動詞「ず」は活用は特殊型であるが、用法・意味から考えると種々の点で形容詞的な性質をもっている。しかるに形容詞性の語は一般に推量や時の助動詞等を自由に接続させることができないのが一つの特徴である。他方助動詞「あり」は活用形式から見れば明らかに動詞的であり、助動詞を自由に接続させることができるが、意味の上からみるとこれも形容詞的である。というわけで結局「やり」は前述の如き「ず」の用法の不完全を補うために助動詞「あり」が接続し、母音が並ぶのをや

いえよう

次に未融合形「ずあり」について調べた。散文系の平安極初期の訓点本および続日本紀所載の宣命において、各活用形母に未融合形「ずあり」と融合形「やり」の数を比較してみると圧倒的に未融合形「ずあり」の方が多い。しかもこれを韻文である万葉集と融合の遅速をくらべると用例は少ないがそれでも万葉の方がいくぶん融合が進んでいる。この理由としては、万葉の融合形「やり」が、これも用例は少ないが、ほとんどの歌の五音あるいは七音の句の中にきちんと歌いこまれたもののみに限られていることから、融合形は韻文の調子を整えるために発生し、

韻文においては早く融合する傾向にあったことが「やり

しに因してもいえそうである。要するに散文系では平安初期でも未融合形がふつうである。さて平安初期の訓点資料が、古事記・日本書紀の訓読に欠くべからざる價值を有することはすでにのべられている。したがって、奈良時代の漢字文献を訓読する場合には、打消の助動詞の「ざり」は当然未融合形「ずあり」でよまなければならないだろう。

注1 国語と国文学オ十七卷オ十号

注2 文学論肆オ一号

注3 万葉オ七号

注4 国語学オ二十六輯

注5 愛媛国文研究オ三号

注6 最近では「時代別辭釈文法」 古典語の助動詞と助詞 大野晋氏の説がある

注7 竹岡正夫氏「富士谷成章のかへしざまについて」 国語国文オ十七ノ八

注8 国語と国文学オ十三卷オ十号

注9 本誌オ八輯

注10 橋本進吉博士「上代語の研究」 48 (三) 48

注11 鈴木一男先生「聖語藏御本唐寫大乗阿毘達磨雄集論調査報告 その一」 本誌オ二輯

注12 鈴木一男先生「聖語藏御本成実論卷十一天長五年點釋文稿」吉陵部紀要六、稻垣瑞穂氏「成

実論天長點(上)(下) 本誌二・三判、鈴木先生

「聖語藏御本成実論卷十三天長五年点釈文稿」

奈良学芸大学紀要オ四卷オ一号、同「聖語藏

御本成実論卷十六天長五年点」 同オ五卷オ

三号、同「聖語藏御本成実論卷十八天長五年

点」 同オ五卷オ一号。

注13 築島裕・小林芳規氏「故山田嘉造氏藏妙法蓮華

經方便品古寫釋文」 本誌オ七輯

注14 遠藤嘉基先生「知恩院藏大唐三藏玄奘法師表啓

古點について」 国語国文昭五二年二月

注15 春日政治博士「西大寺本金光明最勝王經古點の

国語学的研究本文編」

注16 稻垣瑞穂氏「唐招提寺本金光明最勝王經の白点

し本誌才一輯

注17 春日氏論文万葉才七号 55ペ

「如」の訓二つ

大坪 治

訓点語で、「如」は、比況の助動詞としてゴトシと読み、仮設の副詞としてモシと読むこと、周知の通りである。ところが、この他、副詞としてイマ・タト（バと読む）ことがある。この二つの訓は、これまで余り注意されなかったものであるが、古点本を解説する際、このことを心得てゐないと、思はぬ誤読を犯すおそれがある。

一 イマと読む場合

「如」は、単独でもまた、「今」と連文した「如今」の形においても、イマと読まれる。

(1) 如石人の身の説く時に尔の時に石人い更へに餘

有（る）こと無し、而亦説（く）こと得。（聖護藏本成実論天長点卷十六 鈴木一男氏による）
所以者何、如色異なり、聲等異なり。聲等を持（ち）て（而）色といふ心を生（す）ものには（あら）不。若色等に離れば別に地有らば（者）亦色等に持（ち）て（而）地（といふ）心を生（さ）不（ある）應（し）。（同）

(3) 世尊、如吟我、於一切の法を正く知れ正く覺し能く正く觀察セルが。世尊、以て是の因縁を我レ藥叉大將を名く正了知と。（西大寺本金光明最勝王